

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00462

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義と中世日本文芸における自我の無化に関する比較文学的研究

研究課題名(英文) A Comparative Literary Study on the Nullification of the Self in British Romanticism and Medieval Japanese Literature

研究代表者

菊池 有希 (Kikuchi, Yuki)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70613751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：まず、北村透谷がイギリス・ロマン主義における自我の無化への志向と中世日本文芸における自我の無化への志向を結びつける際に、西洋美学における多義的な崇高の概念とイメージを援用していたことを明らかにした。また、透谷の思想に大きな影響を与えたカーライルの「自我の滅却」の思想の淵源をつきとめ、カーライルの思想の意味をノヴァーリスやゲーテとの関係性の検証から明らかにした。さらに、本研究の主題である「無化」の意味を加速主義思想との関わりにおいて捉え直した上で、社会の無化と自我の無化の双方を描き出している透谷の劇詩『蓬萊曲』を現代的な視点から読み直し、透谷における自我の無化への志向の現代性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

北村透谷がイギリス・ロマン主義から受容した「自然の崇高」にまつわる無限性と危機の感覚と、中世日本文芸の精神性、特に芭蕉における「物我一致」の境地とを結びつけようと試みていたことを明らかにできたことは、自我の無化について国際的・世界的な視座から考究する基点の確保という観点から、一定の学術的な意義があったと考えている。

また、カーライルが主張する「自我の滅却」の思想的な淵源と現代的意味を双方明らかにできたことも、思想史の文脈を踏まえつつ現代思想の知見を援用して「自我の無化」という主題にアプローチする道の開拓につながったと考えている。

研究成果の概要(英文)：First, it was revealed that Kitamura Tokoku drew on the concept and image of the polysemic sublime in Western aesthetics when he connected the orientation towards the nullification of the self in British Romanticism with the orientation towards the nullification of the self in medieval Japanese literature. In addition, the origins of Thomas Carlyle's idea of the 'Annihilation of Self', which had a major influence on Tokoku's thought, became clear, and the significance of Carlyle's thought became apparent from an examination of its relationship with Novalis and Goethe. Furthermore, after reconsidering the meaning of the word 'annihilation', the subject of this study, in relation to accelerationist thought, I re-read Tokoku's dramatic poem "Horai Kyoku", which depicts both the annihilation of society and the annihilation of the self, from a contemporary perspective, to clarify the possible modernity of Tokoku's orientation towards the nullification of the self.

研究分野：比較文学

キーワード：自我の無化 北村透谷 カーライル バイロン Annihilation of Self 芭蕉 崇高(自然の崇高) 回心

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの研究の過程で、北村透谷がバイロン、カーライルら広義のイギリス・ロマン主義の文学・思想に影響されながら、同時に西行、芭蕉らにも影響されつつ中世日本の文芸的伝統にも連なろうとしていたこと、その際、透谷がイギリス・ロマン主義の文学・思想と中世日本の文芸的伝統の結節点に「自我の無化」への志向を見出していたことを明らかにしてきた。だが、意味内容も歴史的・文化的文脈も異にするこれらふたつの「自我の無化」への志向が透谷の中でいかなる理路で結び合わされていたのかについては十分に明らかにできていなかった。イギリス・ロマン主義と中世日本文芸それぞれにおける「自我の無化」への志向の問題を考究することで上述の論点を明らかにしたいと考え、本研究を構想した。

## 2. 研究の目的

イギリス・ロマン主義の自我表象・自然表象の方法に強く影響されながら、同時に中世日本の自我表象・自然表象の文芸的伝統に連なろうとしていた北村透谷が両者の結節点に見据えていたのが、「自我の無化」への志向であった。透谷はそこから彼独自のやり方で「自我の無化」への志向を文学的・思想的に表現したが、そうした彼の仕事は東西文化の架橋の可能性を潜在させた重要な知的遺産として捉えるべきものである。本研究では、透谷の文学的・思想的な試みを肯定的に受け止めることから出発して、イギリス・ロマン主義と中世日本文芸それぞれの「自我」「自然」表象における広義の「自我の無化」の意味および表現のありようを分析し、両者のあいだの対話の可能性を具体的に探ることを目的とする。併せて、上記の分析から得られた知見を、「自我の無化」への志向において東西文化の結節・架橋を試みようとした、透谷を含む近現代の文学者・思想家の作品解釈にも還元し、「自我の無化」の文学的・思想的な射程を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

イギリス・ロマン主義における「自我の無化」の問題についての研究

バイロンの「自我忘却」(self-oblivion)の希求、カーライルの「自我の滅却」(Annihilation of Self)への意志は、透谷をはじめとする明治期の文人たちに大きな影響を与えたものであったが、イギリス・ロマン主義の文人の中には、バイロン、カーライル以外にも、自然への没入の感覚を詩的に表現したワーズワースや「無私」(disinterestedness)を主張したハズリット、「消極的能力」(Negative Capability)の重要性を説いたキーツなど、広義の「自我の無化」の思想の提唱者を見出すことができる。このことを踏まえ、イギリス・ロマン主義における「自我の無化」に関わる問題系の射程を確認しつつ、そうした「自我の無化」への志向がどのように文学的・思想的に表現されているかについて具体的な作品分析をおこないながら明らかにする。

中世日本文芸における「自我の無化」の問題についての研究

中世期の日本において「有心」から「無心」へと詩学の価値基準が遷移してゆくという大きな流れがあり、透谷はそうした中世日本文芸において顕在化してきた(広義の)「無心」への志向と、イギリス・ロマン主義における「自我の無化」への志向とを相互に照らし合わせて、彼独自の「自我の無化」の志向を表現していったと考えられる。このことを踏まえ、中世日本の文芸的伝統の全体的文脈を把握することに努めながら、透谷をはじめとする明治期の文人たちに文学的・思想的先達として仰がれた西行、芭蕉ら隠者の文学の「自我」「無我」「自然」表象のありようを具体的なテキスト分析をおこないながら明らかにする。

近現代の文学者・思想家における「自我の無化」の問題についての研究

西洋の文学・思想における(広義の)「自我の無化」への志向と、東洋(日本)の文学・思想における(広義の)「自我の無化」への志向の双方に関心を示しつつ、独自の「自我の無化」への志向を文学的・思想的に追究していった近現代の文学者・思想家は、透谷の他にも存在する(例えば夏目漱石など)。彼らの作品における〈自我の無化〉の具体的な表現のありようを上記(1)及び(2)の研究成果を援用しながら分析し、〈自我の無化〉の文学的・思想的な可能性の射程を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) まず、イギリス・ロマン主義の「自我の無化」への志向と中世日本文芸の「自我の無化」への志向とを結節させた北村透谷の理路を解明するに当たり、透谷が独特なロマン主義的芭蕉像を展開した評論「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を本研究の基点と見定めることとした。「人生に相渉るとは何の謂ぞ」において、透谷は芭蕉の「明月や池をめぐりて夜もすがら」の句の解釈を展開しながら、西洋美学由来の「サブライム」(崇高 sublime)の概念に触れている。この事実から、透谷における「崇高」受容とその応用のありように上述の「結節」の理路を解く鍵があると見当をつけ、西洋における「崇高」概念、特に「自然の崇高」の発見とイギリス・ロマン主義の関わりを精査することから研究を開始した。

イギリス・ロマン主義の「自然 自我 表象」の展開において、崇高なるものとしての山岳の美学化が大きな意味を持っていたことは、M.H.ニコルソンの観念史の研究(『暗い山と栄光の山』)によりすでに明らかにされている。M.H.ニコルソンの著作を基点として関連文献の読み込みからイギリス・ロマン主義の詩学における「自然の崇高」と自我との関係性について理解を構築し、そこで得られた知見を、「自然の崇高」に通じるイメージが展開されている透谷の作品(『富士山遊びの記憶』『蓬萊曲』『人生に相渉るとは何の謂ぞ』『一夕観』など)の読み解きに還元していった。この作業から、イギリス・ロマン主義から受容した「自然の崇高」にまつわる自己存立の危機の感覚と無限性の感覚が、透谷における、「自然の崇高」を前にした際の「自我の無化」の志向に密接に関わっていることを明らかにすることができた。

一方で、西洋美学における「崇高」概念の多義性を踏まえつつ、安直に「崇高」概念で一元的に解釈するのではなく、より精緻に分析・検証してゆく必要があることも同時に確認された。透谷における「崇高」表象は、作品によりバーク的崇高、カント的崇高、シラー的崇高、ワーズワース的崇高と、近似する西洋の「崇高」概念が変化しているということがある。中でもカントの「崇高」論における「無関心性」の問題は、透谷の「自我の無化」への志向に決定的な影響を与えたカーライルの「自我の滅却」の準備段階として位置づけられている「無関心の中心」と関連があるのではないかという問題があり、より深く検討してゆく必要がある。透谷における「崇高」表象の変化の軌跡をたどりつつ、それが透谷における「自我の無化」の主題とどのように関係し、中世日本文芸における「自我の無化」の志向に近似していったのかを具体的に跡付けることはまだできていないが、この作業により上述の「結節」の理路のひとつを浮かび上がらせることができるという見立てについては確信を持っている。以上の作業で得られた知見については、2021年度の在外研究の受入先研究機関であった SOAS (ロンドン大学東洋アフリカ学院)での研究交流会(2021年11月)において中間報告をおこなった。

(2) また、イギリス・ロマン主義の「自我の無化」の志向の中でも透谷の「自我の無化」の志向に特に関わりの深いカーライルの「自我の滅却」について、その思想的な淵源をたずねることでその意味内容をより明確なものにし、中世日本文芸における「自我の無化」の志向につながってゆき得るものがどの点にあったのかを浮かび上がらせることを試みた。この作業においては、カーライルのドイツ文学・哲学との関わり、特にノヴァーリスとゲーテとの関わりを重視した。

まず、ノヴァーリスとの関わりについて、カーライルの「自我の滅却」の典拠のひとつがノヴァーリスに求められることを確認した。ノヴァーリスにおける「自我の無化」の位置づけを解明する作業を進めつつ、カーライルのノヴァーリス論も分析しながら、ノヴァーリスからカーライル、透谷へと継承されてゆく「自我の滅却」の系譜を辿る論を現在構築中である。この作業の中では、まだ中世日本文芸の「自我の無化」への志向に連なってゆくものを浮き彫りにするところまでは至っていないが、本研究の核をなすカーライルの「自我の滅却」の典拠を確認できたことは、本研究全体をヨーロッパ・ロマン主義研究というより大きな地平に投げ返すための基点を確保できたということの意味する。この点で本作業は大いに意義があるものであった。

次に、ゲーテとの関わりについて、カーライルにおける「自我の滅却」と密接に関連するカーライルの「回心」の言「汝のバイロンを閉じよ、汝のゲーテを開け」'Close thy Byron; Open thy Goethe'(『サター・リザータス』)にあらためて立ち返り、検討をおこなった。1768年からその翌年にかけてゲーテは「回心」'Bekehrung'を体験している。カーライルがそれをどのように評価し、そこにどのような「自我の滅却」の契機を見出したかという論点を中心に据え、『詩と真実』における「回心」体験の叙述の検討、カーライルも翻訳した『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中の「美しき魂の告白」の挿話の解釈、ドイツ敬虔主義の思想史的背景の確認などをおこなった。その過程で、カーライルにおける「回心」直前の、「永遠の否定」から「無関心の中心」、「自我の滅却」へと至る虚無化のイメージが、ゲーテの「回心」体験における病中の肉体の衰弱のイメージから発想されたものという仮説を得ることができた。ゲーテは、カーライルの文学・思想においてバイロンの自我の超克を意味する「自我の滅却」の内実を解明する上で重要な存在であるのみならず、透谷における、カーライルの「自我の滅却」の受容によるバイロンの自我の超克の問題を明らかにする上でも無視できない存在である。これまで、透谷におけるカーライルによるバイロンの超克の問題については既に論文として発表しているが、肝心のゲーテを組み込んだ議論を展開できていなかった。本研究で得られた知見により、カーライルの「自我の滅却」の文学的・思想的文脈の全体的な把握を進めることができたことは大きな収穫であった。

(3) さらに、カーライルの「自我の滅却」の「滅却」についても考察をおこなった。カーライル

が用いている‘annihilation’は「絶滅」とも訳し得る語であるが、この「絶滅（大規模で全般的な無化）」については、社会的な大変革を起こすべく現行の資本主義システムを徹底的に破壊を厭わず推進すべしとする加速主義の思想との関連で近年問題化されることの多いテーマである。例えば加速主義の提唱者のニック・ランドも、加速主義の思想の根底に反動的な「絶滅への渴望」(the thirst for annihilation)を見て取っている。ここで‘annihilation’の語が加速主義との関わりで用いられていることに着目し、カーライルの「滅却＝絶滅＝無化」への志向を現代思想の地平に投げ返して現代的な意味を確認する作業をおこなった。実は、カーライルの思想が資本主義の精神、具体的にはシュンペーターの所謂「創造的破壊」(Creative destruction)の考え方と親近性を持つということについては、すでに塩野谷祐一が論じているところである(『ロマン主義の経済思想 - 芸術・倫理・歴史』)。だが一方で、カーライルの思想には単なる資本主義の経済社会の発展に回収されてしまわないものがあることもまた確かである。一見すると「創造的破壊」に絡めとられかねないように見えるカーライルの「滅却＝絶滅＝無化」の思想が現代の加速主義の思想が基盤とする「絶滅への渴望」とはいかなる意味で異なるのか、そしてそのような思想性は透谷にどのように継承されたのかについて、特に透谷の『蓬莱曲』に注目して考察をおこなった。

すでに、『蓬莱曲』におけるカーライル受容については論文としてまとめているが、『蓬莱曲』のクライマックスにおける、大魔王が人間社会を「罪の火」で焼き滅ぼすという黙示録的な場面をあらためて読み解く中で、大魔王の表象に現代資本主義の問題性に通じるものが多く見受けられることを確認できた。そしてそうした現代資本主義の精神の権化とも言うべき大魔王の服従の命令を拒否しつつ「自我の無化」を志向する柳田素雄という人物造型に、人間社会を「滅却＝絶滅＝無化」してしまいかねない現代のグローバル資本主義の破壊性からめとられることをよしとしない透谷の自我の反映を読み取ることができるという解釈を引き出し、ここに『蓬莱曲』という作品の現代性を看取することができる結論づけた。以上の考察は、2022年12月にオンライン開催された早稲田文芸・ジャーナリズム論系主催講演会での「近代詩と現代史をつなぐ」と題した講演にて公にし、同一の題の論考を『早稲田現代文芸研究』第13号(2023年3月)に寄稿した。

(4) 以上、北村透谷及びカーライルを含むイギリス・ロマン主義における「自我の無化」への志向については考察を深めることができた。特に(3)において記したように、「自我の無化」の主題を現代思想の知見を援用して現代的視点から再解釈をおこなえたことは、当初の研究計画の段階では予期していなかったものであり、これからの自身の研究上の視界を大きく広げてくれたものであった。

同じく、研究計画段階で予定していなかった研究の広がりとして、西洋における「ロマン主義的自我の無化」の系譜をたどってゆく中で、「ロマン主義的自我表出に対する批判」としてT.S.エリオットの「個性の滅却」論が近現代詩の展開を考えるうえで無視できない意味を持つものであることを確認できたことも収穫であった。エリオット流の「自我の無化」への志向を検討する作業の過程で、エリオットの反ロマン主義的詩学に影響された日本の戦後詩についての論(「一九四七年の一情景を描き出す「囚人」から「アメリカ」へ」『現代詩手帖』第64巻第8号、2021年8月)を発表することもできた。本研究の意義深い副産物である。

一方で、予定していた中世日本文芸における「自我の無化」への志向については、満足できる成果を得ることができなかった。本研究の要に位置する透谷との関わりを重視して、中世隠者文芸の風雅・風狂の精神の継承者としての芭蕉の読み解き(特に芭蕉における「物我一致」の問題の注目して)を中心におこなったものの、立論のための有効な基点を確保することができなかった。原因は、カーライルを含むイギリス・ロマン主義における「自我の無化」への志向についての研究に時間をかけすぎてしまったということもあるが、何より中世日本の美学・詩学の研究の蓄積に跳ね返されてしまった憾みがある。この点については今後の課題としたい。

本研究で得られた知見は、単発の論文では十全に論じつくすことのできないものが多くあり、著書としてまとめることを計画している。可及的速やかに公にしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊池有希	4. 巻 13
2. 論文標題 近代詩と現代史をつなぐ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田現代文芸研究	6. 最初と最後の頁 pp.1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池有希	4. 巻 64巻8号
2. 論文標題 一九四七年の一情景を描き出す－「囚人」から「アメリカ」へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 pp.82-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊池有希
2. 発表標題 近代詩と現代史をつなぐ
3. 学会等名 早稲田文芸・ジャーナリズム学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本パイロン協会（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 495
3. 書名 『パイロン事典』（「第5章 .パイロンと日本」担当執筆）pp.380-394	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・講演「透谷との出会い」（郷土作家トークイベント「生誕150年記念 島崎藤村リレートーク」（於岐阜県図書館、2022年10月15日）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------